都会の空はにごってた

終戦っ子87人の軌跡

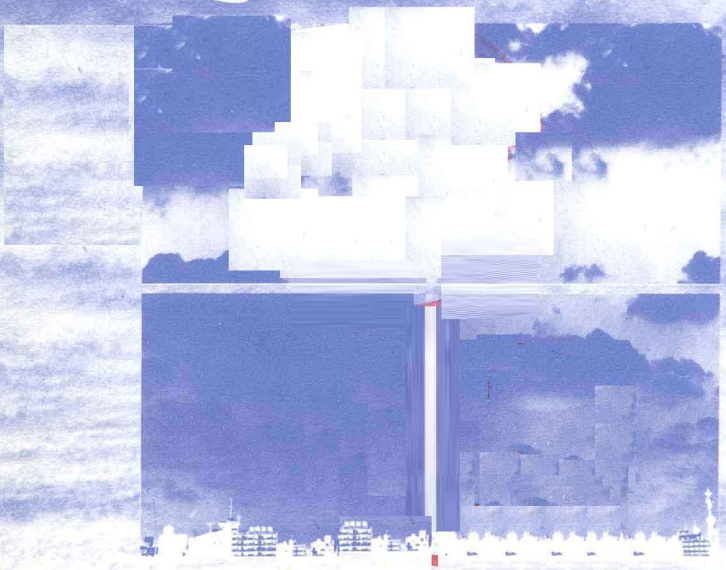
三木賢治
毎日新聞社会部記者

毎日新聞社

都会の空はにごってた

終戦っ子87人の軌跡

三木賢治●毎日新聞社会部記者



〔著者略歴〕

三木　賢治（みき　けんじ）

一九四九（昭和二十四）年、博多市生まれ。東京で育つ。

一九七三（同四十八）年、早稲田大学第一政経学部政治学科卒業と同時に、毎日新聞社に入社。秋田支局勤務。

一九七八（同五十三）年五月、東京本社社会部に移り、現在、警視庁二方面担当のサツ回り記者。

秋田時代の著書に『無重力の風土』（秋田書房刊）ほか。

都会の空はにごってた
——終戦っ子87人の軌跡

昭和五十三年八月十五日印刷
昭和五十三年八月二十五日発行

著者　三木賢治
編集人　高杉治男
発行人　高原富保
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

0036-500494-7904

印刷　図書印刷　製本　大口製本

はじめに

戦後の一時期、農村地帯から都会へ、都会へと潮のように押し寄せてきた集団就職者たちは、今、いったいどうしているのだろうか。わずか十五、六歳の幼さで親元を離れ、故郷を後にして見知らぬ職場に飛び込んだ彼ら――。当然のことながら、生きざまはすさまじい。転職、恋愛、結婚、自立……。あまたの岐路を親にも、学歴にも頼らずに自分一人で乗り越えてきたのだ。

日本の高度成長を底辺から支える役割を担ったのは、間違いなく彼らであり、その功績は大きい。しかし〝金の卵〟とは名ばかり。与えられた職場の環境や待遇は恵まれていたとは言い難い。夢破れ、転職を重ねている者がほとんどで、なかには、悪の道に足を踏み入れ、青春を台なしにしてしまった者もいる。

ここに紹介するのは、雪深い山里の中学、秋田県由利郡大内町立上川大内中を昭和三十六年春に卒業した八十七人である。同町は集団就職者を大量に大都会へと送り出さねばならなかった典型的な過疎地であり、八十七人も、半数以上が集団就職の体験者。おまけに八十七人は終戦の年、昭和二十年に生まれた〝終戦っ子〟なので、その人生の歩みは戦後史とぴったり符合している。そこで、彼らの中学卒業後、今日にいたるまでの軌跡を追跡しながら、集団就職がいかにして生

まれたか、あるいは実態はどのようなものであったか――を探ったのが、このレポートであり、登場する一人一人の生きざまは民衆の戦後史そのものといえよう。

レポートは昨年十二月から今年四月にかけて毎日新聞秋田版に連載した「山の中学から――終戦っ子87人の軌跡」をもとに加筆訂正したもの。取材対象を集団就職者以外にも広げたのは、当時の時代背景を理解するには集団就職に行きたくとも行けなかった「跡取り」や、行く必要のなかった者についても合わせて考えてみるべきと考えたからである。

最後に、取材にご協力いただいた上川大内中の関係者の皆さん、八十七人間の連絡にあたってくれた秋田県庁の佐々木三知夫主事、さらに新聞連載から出版まで応援し続けてくれた毎日新聞東京本社地方部、同出版局の諸先輩に心からお礼申し上げる。

なお、文中では敬称を省略させていただいた。御寛恕願いたい。

一九七八年七月

毎日新聞社会部　三木　賢治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

都会の空はにごってた　目　次

第一章　卒業前夜

・終戦っ子 10　・家族 14　・修学旅行 20　・給食 27
・田植え 30　・進路選択 32　・娯楽 34　・進路決定 36
・記念文集 39　・別離 42　・恩師対談 45

第二章　大都会

・二男坊 56　・母子草 60　・団地族 64　・孤高 70
・試練 74　・裸一貫 78　・一髪の差 82　・取材帳① 86

第三章　Uターン

・歯車 90　・麦飯 93　・転職九回 97　・塩コンブ 100
・回り道 101　・若妻会 107　・孝行 111　・郷土愛 114
・取材帳② 117

第四章　土着派

・出稼ぎ　122　・しゃもじ　125　・いろり端　129
・白衣の天使　132　・包丁一本　136　・年中無休　140
・ペコッコ　142　・平穏　146　・四反歩　148　・肺ガン　152
・秋田杉　155　・希望退職　159　・わが道　162　・取材帳③　165

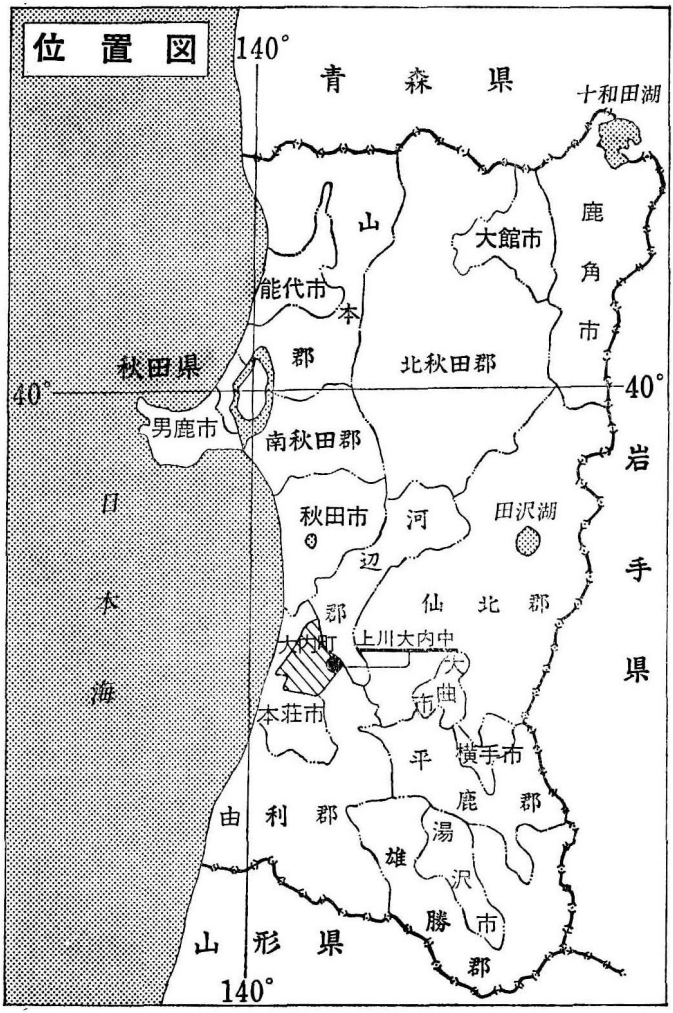
第五章　戦後史の中の〝八十七人〟

・〝金の卵〟じゃない　170　・過疎地の宿命　174
・さながら人身売買　178　・「話が違う！」　185
・世間の冷たい目　190
・〝八十七人の時代〟は終わらない　196
あとがき　200

装幀／水谷　武司

都会の空はにごってた

――終戦っ子87人の軌跡



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　卒業前夜

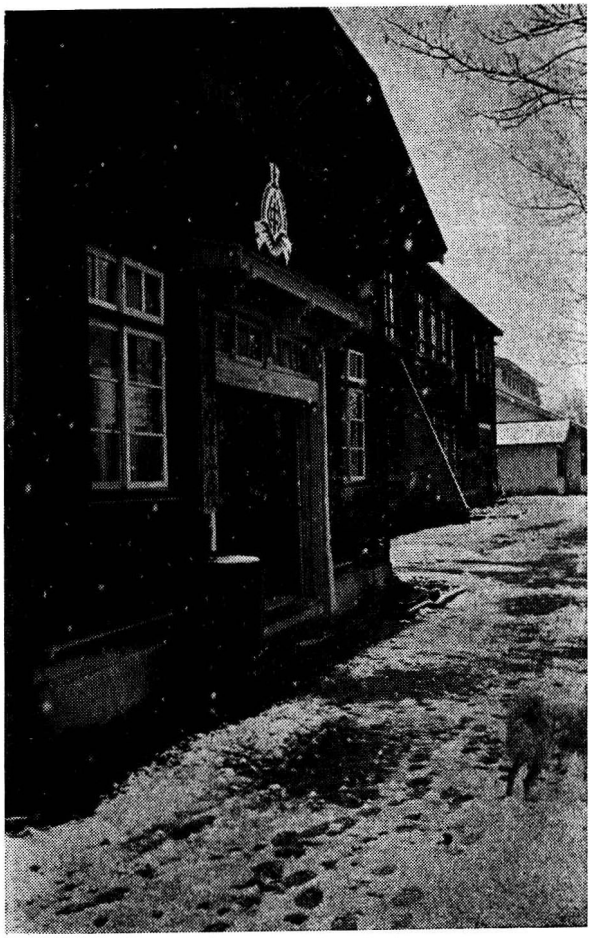
●終戦っ子

国鉄羽越線羽後岩谷駅から、曲がりくねった国道１０５号を東に約二十キロ、出羽丘陵の山ふところに、秋田県由利郡大内町立上川大内中がある。生徒百三十六人、教員十二人という小さな学校。芋川の流れを見下ろす杉林に囲まれた台地上に、同町立上川大内小と向かい合うように木造二階建ての校舎が一棟、ポツンと建てられている。昭和二十四年建築の校舎は、三十年近い風雪の重味を秘めて黒ずみ、正面玄関に掲げられた表札も文字を読み取るのがやっと。中に入ると廊下はきしみ、窓はがたつくが、乏しい過疎地の町財政には建て直しの余裕などありはしない。それどころか、生徒数が減少の一途をたどっているために、思いきって隣の下川大内中と統合しようとする声まで出ている。

北国秋田、しかも山深いから冬は厳しい。毎年、十一月半ばから四月末までは、すっぽりと白い世界に閉ざされる。最大積雪二メートル。同じ町内でも役場がある海寄りの岩谷地区の二倍近い深さだ。上川大内中の各教室から伸びた煙突は、ほとんど一年中取りはずされることもなく、

まきストーブの青い煙を吐き出している。

それでも、最近はさほど不便は感じられなくなった。国道がすっかり舗装され、マイカーや本



大内町立上川大内中学校

荘市方面と結ぶバスがひんぱんに通うようになったからだ。積雪期も除雪が行き届いていて、生鮮食料品に事欠くこともない。

だが、今から十年ほど昔までは違っていた。バスは一日二―三往復しかなく、しばしば不通になった。タイヤがぬかるみにはまれば、乗客全員が外に出て後押ししなければならなかったし、集中豪雨の時は、路上に流れ落ちてきた立木や岩石を取り除きながら前進したものだった。晴れた日でも、本荘市に出るのは一日がかり。おまけに、村人の現金収入の割にバス料金が高かったから、めったに利用できるものではなく、上川大内地区は〝陸の孤島〟にも等しかった。

――昭和三十三年四月、この上川大内中に隣の小学校から八十七人が入学した。生徒たちは終戦の年の二十年四月から二十一年三月までに生まれた者ばかり。父となるべき壮年男性の多くが戦地に奪われていた時代の子供たちだから、全国的に数が少なく、ベビーブーム直前の〝エア・ポケット〟のような世代を形成していた。上川大内中でも新入生が百人を割ったのはこのときが初めてだった。

この年は「なべ底景気」と呼ばれる不況に突入していたとはいえ、社会の趨勢は、めざましい戦後の復興を背景に「神武景気」以来の好景気基調が続いていた。ロカビリーがブームを巻き起こし、日劇では初めてのウェスタン・カーニバルが開催されて平尾昌晃らが脚光を浴びた。銀幕では〝嵐を呼ぶ男〟の石原裕次郎が、プロ野球界では巨人軍に長島茂雄が入団して、ファンの人気を集めていた。世の中が着々と明るさを取り戻していた時期で、皇太子と正田美智子さんの婚

約発表が行われたのもこの年のこと。暮れには一万円札が初登場するなど活気がみなぎっていた。

しかし、山村の生活は戦争による荒廃からなかなか立ち直ることができないでいた。当時の大内村には格別な産業など何ひとつなく、就業人口の七割以上が農民。農地解放後とはいえ、二〇パーセント強が耕地面積〇・五ヘクタール未満の零細農民で、炭焼きや賃仕事で糊口をしのぐ貧しい家庭が多かった。

八十七人の生徒も、戦争の暗い影を負って生きていた。母の胎内にいる時、父が戦死した者、戦後の食糧難の中で父母を栄養失調による病気で失った者もいた。学校で「国家や社会に対して希望すること」というアンケートをとった時、彼らの答えで圧倒的に多かったのが〝戦争を起こさないで〟だった。

彼らの生い立ちで宿命的だったことは、二、三男、女が多かったことである。終戦の年の誕生なので両親は年配者か、極端に若いかのどちらかに偏る。特に戦争中の〝産めよ増やせよ〟を背景にした〝年寄りっ子〟の占める割合が高かったから、長男、長女は少ない。八十七人中、継ぐべき家のある長男は十一人である。産業もなく、耕地面積も乏しい農村で、長男に生まれなかったということは、やがては故郷を離れねばならないことを意味していた。事実、彼らの大多数は中学生活の三年間を離郷の秒読みを待つせっぱつまった思いで通学していた。

●家族

昭和三十五年春、A、B二クラスに分かれた八十七人は三年に進級した。いよいよ就職か進学か、進路を決定する年が来たのだ。県外就職する者にとっては、故郷で過ごす最後の一年である。

当時のわが国は「岩戸景気」と呼ばれる好況時代に入っていた。だが、彼らの住む山村の生活にはさしたる変化がなかった。相変わらず交通が不便だったから、高校に進学する場合には自宅からの通学は不可能で、高校のある本荘市や秋田市に下宿しなければならなかった。だから、都市部に比べて余分な経費が必要で、県立高でも授業料月額六百五十円のほかに四千五百円（三食付き六畳間）前後の下宿代がかかった。これは中卒で就職した場合のトップクラスの月給にも相当したから、貧しく、現金収入の乏しい家庭にとって、子弟を進学させることは至難のわざだった。それどころか、一日も早く子供を独立させて〝口減らし〟をしたがっていた家庭が多かったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.